会議名	第 5 回伊那弥生ケ丘高校将来活用 WG			
開催日	2024 年 12 月 24 日(火)			
開催時間	開会	18：00	閉会	20：30
開催場所	伊那市役所　多目的ホール			
出席者				
協議会・WG メンバー	平賀裕子氏、山本風音氏、須永理葉氏、吉岡秀幸氏			
事務局・職員	商工観光部：柴商工振興課長、林課長補佐 教育委員会：唐澤学校教育課長、伊藤課長補佐 地域創造課：浦野係長			
関係者	上伊那地域振興局　企画振興課　杉本主事			
欠席者	大塚純氏			
議事	１．キックオフイベント WG のテーマについて ２．当日の体制、対話の進め方、参加者への声掛けについて			

議事項目	概要	次のステップ
1、プロジェクトの規模と現状について		
会議事項について	〇WG メンバー ・議事録をもとにテーマ、内容について作ってみた。 ・テーマは、「将来、よい場をつくろう。」といいたくて、「対話してつながって、弥生の将来活用を実現しよう。」としたが、皆さんの意見をお聞きしたい。 ・あと当日、参加してもらいたい人、誰に声をかけて呼びたいかを話しあいたい。	
テーマについて	〇WG メンバー ・「弥生の将来活用」の部分を変えられたらいい。 〇WG メンバー ・弥生のテーマの中心を「学び」としていいのか。という問題提起が前回されたが、「学び」でよいか。 〇WG メンバー ・テーマは「学び」でいいと思うが、「学び」にする前提が重要。 ・伊那市に教育移住する人は多い。教育が軸となっている。伊那市の個性となっている根拠を示す。 〇WG メンバー ・特色のある教育を進めていくのであれば、学校を支援していく体制を両軸で進めていかないと、不十分	

	な教育しか取り組めなくなる。期待される教育どころか共倒れとなってしまう心配はある。 〇WG メンバー ・地域が担い、家庭が担えない学びの場となっていければいい。 ・学校をサポートする場になれば。 〇WG メンバー ・伊那市の教育の在り方について考える場。施設うんぬんではない場であればいいなと思う。 〇WG メンバー ・学校は、教育サービスを受ける場所ではない。一緒に作っていく場所。 ・教育移住してくる人にも、理解してもらえるプロモーションをしていかなければいけない。 〇WG メンバー ・当日の進め方案の中で、自分がどういう関わり方ができるか。を聞くというのはよい視点だと感じる。 〇WG メンバー ・全員で自己紹介したり話あう場にしたいが、それができるのは 30 人が限界だと思う。 ・最初は、全員あわせて意見を聞く場をやりたい。その後、分科会にわかれてもよいが。 〇WG メンバー ・このプロジェクトは面白いと思う。「伊那市の未来のビジョンをあなたが立てる。」というコンセプシャルなものに参加できることはすごいこと。 〇WG メンバー ・市のブランディングコンセプトの発表のスケジュールはどうなっているのか。 ・施設の軸と市のコンセプトと並走していかないと。 〇市から報告 ・方向性はある。 〇WG メンバー ・高校生の街が面白くないという話があったが、街の癖を出していく。全員に好かれるものでなく、癖を打ち出して、賛同する人で作っていくのもいいと思う。 ・少数派の意見もよければ引き上げる姿勢で。 ・ランドスケープでもやっているが、最初は調査、コンセプト、計画、デザイン。 ・伊那市の現状や課題を種として蒔いて、そこから引き出していく。いきなり意見を引き出すのは、その	

	人の枠でしか見れない。調査は、自分の枠を超えるため。 ・伊那市に、これがないから創っていく、これがあるから引っ張り上げていく、今あるものとないものを把握しておいて、それをプレゼンするというのもいいと思う。 〇WG メンバー ・この場で、自分たちの街を自分たちで作り上げていくという主体の機運を高めていく。 ・自分たちの学びや暮らしを決定していくというワクワク感に変えていくモチベーションができれば自律的に進んでいく。 〇WG メンバー ・キックオフイベントは、具体的に何かを話すということではないと思う。 ・自分たちのことを自分たちで決めていきましょう。という機運を高めていく場。 ・自分たちで何か調べてきてくれるような人を沢山作っていければ。 ・前に進むような話にはならない。 ・あとは、誰を呼ぶかとテーマを決めていきたい。 ・学びでいくと、生きていること自体が学び。 〇WG メンバー ・単に「学び」っていうと、教育がイメージされるが、仕事も、暮らしていくことも学びということだと思う。 〇WG メンバー ・支援活動を通じて、余暇も学びだと感じた。 〇WG メンバー ・ブックスマート、ストリートスマートという言葉がある。ブックスマートは本から学ぶこと。ストリートスマートというのは通りで実践の中で学ぶこと。知恵とか物の見方。両方ある人が強いということもある。 〇WG メンバー ・枠で考えると、若い人たちは、地方は東京と比べてエンタメがないからつまらないとなるがそうではない。地域に学びの場があることで、枠を超えることになる。 〇WG メンバー ・「生きると学ぶ」を還元しようはどうか。 〇WG メンバー ・「新しい実学」はどうか。	

	○WG メンバー ・将来活用ということは、具体的に将来活用に入る前に、活用を見据えて、伊那市の生きると学ぶを実現しよう。あの場で実現しようということ。 ・生きるが入ったので、広めの話もできそう。 ・ここの場では、教育の在り方だったり、新しい学びって何かであったり、伊那市の未来のビジョンを作ったり、自分たちで話し合って決めていく場ということをステートメントとして投げかける。	テーマは、「対話してつながって、「いきるとまなぶ」を実現しよう。」に決定
対話の場の進め方について	・ひとりひとりじっくり話を聞く。参加人数で話す時間を決める。	
「学びの種」をどうやって拾うのか。	・テーマとして、学びの種を自己紹介に入れ込んでもらう。 ・「学び」に対して思うこと。自分がどう関われるか。 ・ファシリテーションは大塚純氏にやってもらう。 ・情報を共有して、参加者から種を拾って、これから一緒にやっていきましょう。という話をしていく。	タイマーを用意 （タブレットで表示）
今後の進め方	「いきるをまなぶ」としたら、誰かゲストを呼んで学んでいくのが望ましい。場の活用アイデアのコンペをやってもいい。	
地域コミュニティの実現に活用したい。	○WG メンバー ・「学び」をコンセプトにしたいというのは、皆さん共通している。 ・地域のコミュニティが薄れてきている。地域コミュニティを実現するために、弥生を活用していろんな話をしたい。仮に実現されなくても財産になる。 ・アイデアを沢山出してもらっても、実現することは難しいが、多世代の人と話をしたという過程が重要ではないか。 ○WG メンバー ・そのプロセスが学びになる。 ○WG メンバー ・弥生でダメでも、別のところで芽が出るかもしれない。 ○WG メンバー ・自分自身、プレーヤーを探さなきゃという枠にしばられていたけど、みんなでワクワクしようという会でよければ、それにも惹かれる。 ○WG メンバー ・判断基準を「ワクワクするか」にしてもいいかも。 ・ワクワクをつなげていければ、楽しい場所になる。	

	○WG メンバー ・個人的には、「伊那市ならでは」というのがあって、それは何だろうなというのを、対話を通じて見出していけたら。 ・森があって、教育のベースがあって、そこに熱心な人たちがいっぱいいるというのがある。 ・伊那市だからできるワクワクって何か。個人的には興味がある。 ・森を極める、森のまち、森のプロダクトで埋めるぐらいのワクワク感があれば。	
伊那市ならではのワクワクは。	○WG メンバー ・どうしてもビジュアルでイメージしまいがちだけど、森が持っている哲学みたいなものは、目に見えない形で持っていた方がやりやすいかもしれない。 ・どうしてもビジュアルである必要はないとも思う。	
対話の場での投げかけは。	○WG メンバー ・最初は、狭めなくて、アイデアのフレスコ画みたいな広がりでもいい。 ・そこから種を拾いあげていく。付箋に書いて貼っていく。 ・次回以降、種の中からワクワクするものがあれば、実験して試行錯誤する。	付箋、マジック 社会実験していく。 プチイベントなど
参加者で呼びたい人は。	○WG メンバー ・弥生ヶ丘高校の同窓生 ・中学生、高校生、大学生 ・多集室に来る人 ・マルシェに来ている大学生	
当日の役割	進行：大塚氏 【情報共有について】 1 県の活用方針（市） 2 伊那市活用案の検討（市） 3 伊那弥生ヶ丘高校校地について（須永氏） 4 伊那新校　校舎整備等スケジュール（市） 5 WG の進め方について（平賀氏） 6 市民との対話スケジュール（平賀氏） 7 活用の参考例（市）	県へ公開内容の確認 内容が固まったらスラックで共有して意見をもらう。
当日の準備品	【当日必要なもの】 ・ガムテープ（名前書く） ・付箋（30） ・マジック（15） ・ホワイトボード	

	・白紙（30） ・プロジェクター ・タイマー（タブレット）	
2、今後のスケジュール		
・次回の日程	・1 月 21 日（火）18：00　いなっせ 6 F	対話・つながり・実現の場